

「戦争と平和！」 第 12 回

甘栗 1 個からの話

松本 紀彦

以前、遊学していた「生きがい大学」の学友だったNさんとの不思議なご縁をお話し致します。

或る日、校友会のバス旅行で「筑波宇宙センター」に向かっていた。そのバスの中で前列に座っていたNさんから「甘栗でも食べませんか」と数個の甘栗を勧められました。



Nさんにお礼方々「僕はこの天津甘栗の産地の天津で生まれたのですよ」と何気なく話したら「エッ、それでは天津の塘沽港から引き揚げてきたの？」と言われて、想定外の返答に大変驚きました。

私自身は記憶の彼方に忘れ欠けていた「塘沽」

(タンクー)という言葉が突然言われてビックリ。「Nさん何でそんな地名を知っているのですか？」と聞き

返しました。Nさんは、私は終戦後に「引き上げ船の船員をやっていたので、中国の天津塘沽港には何度も行っていましたよ。」との話で、これには2度ビックリして思わず目が点になりました。

サア～それからは、タイムマシーンに乗って一気に70年前の過去に遡り、延々とその当時の思い出話を語り合いました。縁もゆかりも無いと思っていたNさんと「ピンポイント」のご縁があることが判り、お互いの厳しい時代の生き様や、全く知らなかったNさんの青春時代のお話を聞かせて戴きました。

Nさんの戦時中の経歴は、命懸けのすさまじいもので、学園時代にお見受けした「温厚なご

隠居様」の印象とは懸け離れ、生死のはざまを何度も乗り越えた辛く厳しいものでした。

戦時中は10代の学生時代に召集され海軍の輸送船に乗っていました。戦争末期には南シナ海で乗っていた艦船が米軍の猛攻撃を受け、最後に魚雷が命中して沈没し、サメのいる海中に投げ出され生死不明の状態に在りました。十数時間の漂流後にヤット友軍の艦船に救助され、奇跡的に生還したとの事です。

もう一度は、広島で幹部候補生として訓練中、原爆に遭遇する直前でしたが、ラッキーな事に上官から郊外に所用を命じられ、広島の爆心地から離れていた為に九死に一生を得たとの事です。

戦後は一転して、故郷でのんびり畑を耕していたそうです。ところが、マッカーサーの司令部GHQから突如呼び出しが来て、何事かと不安をもって上京しました。GHQからの命令は、邦人の引き上げのために「引揚者の輸送業務」に就いて欲しいとの事。早急に米軍貸与の上陸用舟艇LSTに乗り込み、中国や韓国に残留している数万人の邦人を引き取る任務に就けとの命令でした。

もしかして、私達の一家が昭和21年2月天津、塘沽港からの引き上げの際に、Nさんの乗船していたLSTに乗っていたかも知れません。今となっては検証の術もない事です…。

数日間狭い艦艇の中で船酔いに耐え、不味い食事に耐えヤット佐世保港に着きました。「日本に着いたぞ～」の興奮した声が艦内に響き渡り、ほぼ全員が甲板に出て身動きもせず港湾を眺めていた姿や、幼い私が船の甲板から見た佐世保の青い山々は目に染みて、今も忘れられません。これが「甘栗1個から」Nさんとの奇遇な御縁の始まりでした。Nさんは現役時代に様々な重責を担う仕事をし、航空事業の発展に貢献された功労者です。偉そうなところは微塵も見せず、いつも泰然自若、遊び事は常に楽しくて大人の風格のある所をいつも見せられてとても尊敬しています。

